The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	飢えと屍肉 : 何のための食事か
Author(s)	河﨑, 豊
Citation	印度民俗研究. 2016, 15, p. 3-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

飢えと屍肉

― 何のための食事か ―

河﨑　豊

１．はじめに

『ナーヤーダンマカハーオー』（*Nāyādhammakahāo*『喩例と法話[1]』）は、ジャイナ教白衣派が伝承する聖典中、アンガ（Aṅga「肢」）という範疇の第六を構成する宗教説話文献であり、マハーヴィーラ（Mahāvīra）の筆頭弟子（gaṇadhara）の一人であるスハンマ（Suhamma）が、自らの直弟子であるジャンブー（Jambū）に語るという体裁を取る。その第一巻十八章「スンスマー（Suṃsumā）」は、死んだ我が娘の血肉を、飢えを凌ぐために父子が食べる逸話を、修行者の食事に対する心構えと絡め説くという題材を持つ点で注目されるほか、盗賊の習俗が説かれるなど、文化史的にも興味深い素材を提供する。仏教とジャイナ教の双方がしばしば使う「子の肉を食べる喩」の意義については既に優れた研究がある[2]ためそれに譲る。但し、当該章を現代日本語で全訳したものは今のところ存在しない。ここで取り上げる所以である。

訳出にあたって用いた底本は以下である：
Muni Jambūviijaya (ed.), *Ṇāyādhammakahāo*, Jaina-Āgama-Series No.5, Bombay: Shrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1989, pp.334-347.

また、適宜以下の校訂本に含まれるものを参照した：
Muni Nathmal (ed.), *Anga Suttāni* III, Ladnun: Jain Vishva Bharati, v.s.2031, pp.347-358.

本経には 11 世紀の Abhayadeva によるサンスクリット註釈が現存する。それについては、校訂に難があるが以下を用いた：
Muni Dīparatnasāgara (ed.), *Āgamasuttāṇi* bhāg 7, Ahmedabad: Āgama Śruta Prakāśan, 2000, pp.241-248.

原文はアルダマーガディー（半マガダ語）で記された、白衣派

---

[1] W.Schubring, *Die Lehre der Jainas* (Berlin & Leipzig, 1935), p.63 が示した理解に拠る。白衣派聖典全体の構成や各経の梗概については、同書 pp.52-84 の解説が簡にして要を得ている。
[2] 谷川泰教「子肉の喩（Puttamaṃsūpamā）」『高野山大学論叢』35（2000）pp.1-22 を参照されたい。

聖典の散文に特有の冗長な文体である。ある程度の直訳を心がけつつ、頻発する同一動詞の Indicative と Gerund の連続する言い回しや、同一文の繰り返しなど、読解に支障を来す煩雑な箇所はしばしば省略した。但しその箇所はいちいち指摘していない。段落分けは底本に従わず任意に施す一方、セクション番号は底本のものを踏襲した。角括弧内に示した頁数も底本のものである。

白衣派聖典、特に散文で書かれた物語経典には、五世紀の聖典編纂会議で挿入されたとされる、冗長な描写を省くためのjāva「乃至」やvaṇṇaa「描写」等の省略語が頻出する。白衣派聖典において、いかなる文章がいかなる基準で省略されるかという問題は、未だ明確ではない白衣派聖典の伝承問題[3]を考える上で重要な研究対象であって、省略文や省略箇所を常に提示し検証することはもちろん意義があるが、今回は基本的にそれらの作業を避け、「～するなど」と訳すか、単に無視した[4]。一方で、底本の校訂者による原文の補いは訳し、筆者による訳語の補いと共に亀甲括弧で囲んで提示した。

最後に、本章は筆者が担当したアルダマーガディー文献講読の授業で取り上げたテキストである。参加者の雨夜美月さんと上田真啓さんに感謝申し上げる。言うまでもなく、翻訳に対する責任は全て筆者にある。

【*Nāyādhammakahāo* I 18 Suṃsumā 和訳】

§136 [p.334]
〔ジャンブーは言った〕
幸いなる方よ、沙門マハーヴィーラ尊師によって『ナーヤ[5]』第十七章のこの意味は説明されたのであれば、幸いなる方よ、沙

[3] この点については、拙稿「*Uttarajjhāyā* の諸伝承」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』25 (2014), pp.19-30 も参照されたい。
[4] Aṅga Suttāni 版は省略箇所を復元し原文を提示するが、その復元がいかなる根拠に基づくかを示さないため、扱いに注意が必要である。
[5] 本章では、このように『ナーヤーダンマカハーオー』は『ナーヤ（Nāya）』と称される。

門にして…[6]到達したお方によって、『ナーヤ』第十八章のいかなる意味が説明されたのでしょうか？

〔スハンマは言った〕

このように、いいかねジャンブーよ、その時、その機会に[7]、ラーヤギハ[8]という都城があった ― 描写[9]―。そこにはダナ（Dhaṇa）という隊商長がいた。彼の妻はバッダー（Bhaddā）であった。隊商長ダナの息子でバッダーの実子に、五名の隊商長の男子がいた。それはつまり、ダナ（Dhaṇa）、ダナパーラ（Dhaṇapāla）、ダナデーヴァ（Dhaṇadeva）、ダナゴーヴァ（Dhaṇagova）、ダナラッキア（Dhaṇarakkhia）であった。隊商長ダナの娘でバッダーの実子にして、五名の息子たちに続いて生まれた者がスンスマー（Suṃsumā）という名の女であり、非常に華奢な手足をし…[10]ていた。

隊商長ダナにはチラーヤ（Cilāya）という名の奴隷[11]がいた。五体満足で肉付きがよく、子供を遊ばせるのに長けた者でもあっ

---

[6] 「…」で示した箇所は、原文では jāva という省略語が記されている。以下、jāva で示される省略箇所は、特に必要と考えた場合を除き指摘しない。なおマハーヴィーラの描写部分については、拙稿「マハーヴィーラの肉体 ― ジナ身観の研究（１）―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46 (2006), pp.37-63, esp., pp.41-46 を参照されたい。

[7] te ṇaṃ kāle ṇaṃ te ṇaṃ samae ṇaṃ を、teṇaṃ kāleṇaṃ teṇaṃ samaeṇaṃ に訂正する。

[8] Rāyagiha. いわゆる王舎城（Rajgir）。

[9] ここで「描写」と訳した vaṇṇaa が、五世紀の聖典編纂会議で挿入されたとされる、冗長な描写を省くための一種の符号である。その完全な形は、例えば白衣派聖典の *Aupapātika* 冒頭部分に見出される。

[10] 省略される女性の描写については、A.Mette, "Veḍhas in Lalitavistara und Divyāvadāna: Beschreibung des schönen Körpes in Sanskrit und Prakrit," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* XXVII (1973), pp.21-42 を参照されたい。

[11] dāsaceḍa. dāsa も ceḍa も通常は「奴隷」の意味しか持たないため、単に「奴隷」と訳した。しかし、同語が出現する NDh I 2 §34 に対し Abhayadeva 註（p.88）は、「dāsaceḍa とは、dāsasya〔つまり〕雇人の ceṭaḥ〔つまり〕少年である。あるいは、あの者は dāsa で ceṭa だ、というので dāsaceṭa である」（dāsaceḍe tti dāsasya bhṛtakasya ceṭaḥ kumārakaḥ dāsaceṭaḥ athavā dāsaś cāsau ceṭaś ceti dāsaceṭaḥ）と説明する。この解釈に基づけば、当該表現は「奴隷の息子」か「少年の奴隷」と訳す可能性がある。

た。さて、その奴隷は娘スンスマーのお守り役となった。彼は娘スンスマーを腰のところで掴み、多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちと共に、何度も愉しみながら過ごしていた。

さて奴隷のチラーヤは、多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちのうち、幾人かの子供たちのものである小さな貝殻[12]を引っ手繰った。このようにして小さな球・玩具（？）[13]・木製ボール[14]・人形[15]・上衣を、ある子供たちのものである装身具・花環・装飾品を引っ手繰った。ある者たちを叱責した。かくて、彼は嘲り、責め、恫喝し、脅した。ある者たちを打ち据えた。

[p.335] すると、多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちは泣き、大声をあげ、声をまき散らし、悲しみ、うめいて、おのおのの父母に訴えた。すると彼ら多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちの父母らは、隊商長ダナのもとに近寄って、隊商長ダナを消耗させ、ぶつぶつと、傷つける多くの言葉で消耗させ、ぶつぶつ言い、傷つけながら、隊商長ダナにこの件を訴えた。そこで隊商長ダナは、奴隷のチラーヤに繰り返しこれを禁じた。しかし、奴隷のチラーヤが止めることはなかった。

さて奴隷のチラーヤは、彼ら多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちの小さな貝殻を引っ手繰るなどし、打ち据えた。そうすると、多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年た

---

[12] khullaya. Abhayadeva（p.242）は kaparddakaviśeṣa「ある種の貝殻」とする。
[13] āḍoliyā. 不明。Skt.*ālolikā か？
[14] teṃdūsaya. 不明。Abhayadeva（p.242）は kanduka「木の球」とする。
[15] pottullaya. 何らかの衣類を指す可能性もある。この語に対し Abhayadeva（p.242）は vastramayaputrikā athavā paridhānavastrāṇi「布でできた人形か、あるいは衣服用の布」とする。恐らく Abhayadeva は当該語の語源として *pautra-ulla-ka と*pota-ulla-ka の二種類を想定していると考えられる。

ち・少女たちは泣くなどしながら、父母に訴えた。すると彼らはすぐに怒り、激怒し、激昂し、荒ぶれ、燃える炎のようになりながら[16]、隊商長ダナに近寄り、多くの消耗させる〔言葉などで消耗させるなどして〕この件を訴えた。するとかの隊商長ダナは、多くの男児たち・女児たち・新生児の男児たち・新生児の女児たち・少年たち・少女たちの父母らの傍でこのことを聞くやいなやすぐに怒り、激怒し、激昂し、荒ぶれ、燃える炎のようになりながら、奴隷のチラーヤを様々に非難し、口撃し、恫喝し、責め、脅した。様々に殴打して、自分の家から外に追い出した。

§137　すると、奴隷のチラーヤは自分の家から外に追い出されたまま、ラーヤギハ [p.336] 都城の三叉路などや道、そして神祠・集会所・給水地・賭場・娼館・水小屋・呑み屋で極めて暢やかに愉しんだ。その後、件の奴隷チラーヤは、締め出されることも妨げられることもなく、自分の快楽本位で、自分の愉しみに基づいて行動し、酒に執着し、窃盗に執着し、賭博に執着し、娼婦に執着し、他人の妻に執着していた。

さて、ラーヤギハ都城の遠くでも近くでもないところ、南東の方面に、シーハグハー（Sīhaguhā）という名の盗賊の隠れ家があった。山の尾根の険しい稜線に入り込んだ所であり、竹垣の塁壁で囲まれ、割れた岩を施した平坦でない溝の濠が覆い、門は一つだが、顔が割れている者が出入りできるよう壁に無数の隙間があり、内部に水はあるが端では水が極めて得がたく、到来する非常に多勢の救援軍にとって破壊しがたいものでもあった。

[p.337] さて、そこ ― つまり盗賊の隠れ家たるシーハグハーには、ヴィジャヤ（Vijaya）という名の盗賊の首魁が定住していた。無法者で、無法を旗印とし、決起し、多くの都市で名声を失い、勇猛で、強力な攻撃をし、向こう見ずで、音しか聞こえないほどの矢を放つ者であった。彼はそこ、つまり盗賊の隠れ家たるシーハグハーで、五百人の盗賊に支配者性などを〔行使して〕過ごしていた。

---

[16] misimisemāṇa. 本来は炎が燃え盛る際の音を表すオノマトペ。

[p.338] さて盗人の首魁ヴィジャヤは、多くの泥棒・姦夫・掏摸・強盗・押し込むための穴を穿つ者[17]・王に反抗する者・債務者・嬰児殺し・安心を脅かす者・博徒・警吏[18]たち、また他の多数の、〔刑罰で手などを〕切られた者や〔鼻などを〕もがれた者[19]や国外に追放された者たちの屋根[20]ともなった。かくて盗賊ヴィジャヤは、ラーヤギハ南東の国土を、多数の村落の破壊・都市の破壊・牛泥棒・囚人の奪取・追剥・押し込むための穴を穿つことで、次々と圧迫し、次々と粉々にさせ、居場所も財産もない状態を次々ともたらしては過ごしていた。

さて、例の奴隷のチラーヤはラーヤギハにおいて、富について疑う人々や、窃盗について疑う人々や、姦通を疑う人々[21]や、富裕者たちや、博徒たちという大勢の人々によって何度もつまみ出されてしまい、ラーヤギハから出て行って、盗賊の隠れ家たるシーハグハーに近寄った。かくて、盗賊の首魁ヴィジャヤに身を寄せて過ごした。

その後、件の奴隷チラーヤは、盗賊の首魁ヴィジャヤの先頭で細身の剣を持つ者[22]ともなった。そして、かの盗賊の首魁ヴィジャヤが村落の破壊などや、あるいは追剥を行なおうとうろついている時には、チラーヤは極めて多勢の救援軍をも打ち倒し、かき乱すなどして押し止めた。そのようにしてから、またしても富を

---

[17] 盗賊が抜け穴を穿ち家に押し込むことについては、M.Bloomfield, “The Art of Stealing in Hindu Fiction,” *American Journal of Philology* XVIV,2 (1923), pp.97-133, esp.,pp.114-117 を見よ。

[18] khaṃḍarakkha. あるいは獄吏。犯罪者やならず者を列挙する中にこの職掌を持つ者が含まれることは興味深い。

[19] Abhayadeva（p.244）の chinnā hastādiṣu bhinnā nāsikādau という説明に従って語を補った。

[20] 庇護する存在の謂い。

[21] dārābhisaṃkīhi. 直訳すれば「妻について疑う男たちによって」。

[22] aggāsilaṭṭhiggāha.「先頭で」とした agga-について、Abhayadeva（p.244）は「先頭（purastāt）」と「主要（pradhāna）」という二つの可能性を提示する。しかし、チラーヤがこの時点で盗賊団の主要成員だったとは考え難く（←次註）、ヴィジャヤの用心棒のような役割で参加していたに過ぎないと思われる。

得、なすべきことをなし、まったくの無傷で [p.339] 盗賊の隠れ家たるシーハグハーへ速やかにやって来た。すると、かの盗賊の首魁ヴィジャヤは、盗人 [23]チラーヤに多くの盗賊の呪法や、盗賊のマントラや、盗賊の幻術や、盗賊の詐術を学ばせた。その後、かの盗賊の首魁ヴィジャヤは、ある時に死去した。

そこで、彼ら五百人の盗賊たちは、非常に盛大な富と尊敬とを集め、盗賊の首魁ヴィジャヤを火葬の薪に運ぶ儀式を執行し、多くの世俗的な葬礼を行ない、やがて悲しみから逃れた。その後、彼ら五百人の盗賊たちは互いに呼び合い、このように言った―

「さあ、よいか、神に愛される者たちよ。我らが盗賊の首魁ヴィジャヤは身罷ってしまわれた。ところがこの盗人チラーヤは、盗賊の首魁ヴィジャヤから多くの盗賊の呪法などを学ばせられている。ゆえに、神に愛される者たちよ、我らにとってより良いことといえば、盗賊の隠れ家たるシーハグハーで盗人チラーヤを盗賊の首魁として灌頂することだ」

以上のように言って、お互いがこの件に同意し、盗賊の隠れ家たるシーハグハーでチラーヤを盗賊の首魁として灌頂した。

かくして、かのチラーヤは盗賊の首魁となり、無法者として過ごしていた。その後、盗賊の首魁チラーヤは盗賊の指導者として、屋根ともなった。彼はそこ、つまり盗賊の隠れ家たるシーハグハーで、五百人の盗賊たちにとって…[24]ラーヤギハ都城の南東部を、居場所なき状態、財産なき状態となしては過ごしていた。

§138　さて、盗賊の首魁チラーヤは、ある時に食べ物・飲み物・噛む食べ物・味わう食べ物を大量に準備させ、彼ら五百人の盗賊たちを呼び寄せた。それから、沐浴し [p.340] バリ供養を行なっ

---

[23] ここで初めて盗人（takkara）と呼ばれるところを見ると、この時点までチラーヤは仲間たちに正式な盗人と認められていなかったと考えられる。
[24] 底本では、ここで「このように、ヴィジャヤの如く、まさしくその全てが同じである」という一文が存在する。これは、先代の盗賊の首魁であるヴィジャヤの描写を繰り返すべきであることを指示するものである。

て、食堂で彼ら五百人の盗賊たちと共に食べ物・飲み物・噛む食べ物・味わう食べ物と、スラー酒[25]・マフ酒[26]・メーラガ酒[27]・ジャーイ酒・シードゥ酒[28]・パサンナ酒[29]を味わい、様々に味わい、堪能し、享受して過ごした。食べ終わり享受し終わって、立ち上がり、彼ら五百人の盗賊たちを、大量の食べ物・飲み物・噛む食べ物・味わう食べ物と、香・花・薫香・花環・装飾品とでもって、尊び敬った。その末に、こう言った―

「さあよいか、神に愛される者たちよ。ラーヤギハ都城にダナという名の富裕な隊商長がいる。彼の娘にしてバッダーの実子で、五人の息子たちに続いて生まれた女に、スンスマーという五体満足で…別嬪な娘がいる。それゆえ、神に愛される者たちよ、我々は行こうではないか。隊商長ダナの家を粉々に破壊しようではないか。豊富な財産や黄金などや、水晶（？）[30]や珊瑚はお前たち

---

[25] surā の製法については、永ノ尾信悟「古代インドの酒スラー」山本紀夫・吉田集而（編）『酒づくりの民族誌』（八坂書房、1995）、pp.203-216 を参照されたい。

[26] サンスクリットの madhu に相当する。蜜酒と考えられるが、数種の酒の製法を記した *Kauṭilīyārthaśāstra* (ed. Kangle) によると、madhu は「葡萄の汁から作られたもの」（2.25.24: mṛdvīkāraso madhu）である。

[27] サンスクリットの maireya に相当する。*Kauṭilīyārthaśāstra* 2.25.22 によると「メーシャシュリンギーの樹皮の煎じ汁に糖蜜を加え、長胡椒と黒胡椒とを混ぜ合わせて、任意に三つの果実を加えたものがマイレーヤである」（ meṣaśṛṅgītvakkvāthābhiṣṭo guḍapratīvāpaḥ pippalīmaricasaṃbhāras triphalāyukto vā maireyaḥ）。

[28] K.T.Achaya, *Indian Food: A Historical Comparison* (Delhi, 1994), p.59 によると、砂糖黍の汁と dhātaki（*Woodfordia fruticosa*）の花とを発酵・蒸留したもので、その花が赤色とタンニンを加え、発酵を促す。

[29] サンスクリットの prasannā に相当する。*Kauṭilīyārthaśāstra* 2.25.18 によると「12 アーダカの粉、5 プラスタの発酵材、または〔この発酵材の代わりに〕この種類特有の混合物にクラムカの樹皮と果実とを加えたもの、これがプラサンナーの組成」（dvādaśāḍhakaṃ piṣṭasya pañca prasthāḥ kiṇvasya trimukatvakphalayukto vā jātisaṃbhāraḥ prasannāyogaḥ）である。

[30] silā. 基本的に「岩、石」を意味するこの語が何の宝を指すかは難しい問題である。パーリ仏典『アングッタラニカーヤ』（*Aṅguttaranikāya*） IV 199 は、アスラが住む大海に見られる第七の稀有なことに、大海が様々な宝に満ちていることを挙げ、その宝の一つを silā とする。五世紀のブッダゴーサ（Buddhaghosa）は、註釈『マノーラタプーラニー』（*Manorathapūraṇī*）IV 111 で、当該箇所の silā を「白、黒、もやし豆の色などの区分があり、多種類である」（setakāḷamuggavaṇṇādibhedo anekavidho）と説明する。

のものだが、娘スンスマーは私のものだ」

そこで、彼ら五百人の盗賊たちは、盗賊の首魁チラーヤが言うこの件に同意した。

かくして、かの盗賊の首魁チラーヤは、彼ら五百人の盗賊たちと共に濡れた皮に乗った[31]。乗った後、日中に、五百人の盗賊たちと共に武装して兵器や武器を持ち、毛の付いた胸当て・小型の盾・〔鞘から〕抜き払った細身の剣・肩に背負った矢筒・弦を張った弓・引き絞られた矢・跳ね上がった（？）火器[32]を装備し、腿につける鈴をぶら下げ、チッパトゥーラ[33]を鳴らし、非常に大きな勝鬨や獅子の如き咆哮などや [p.341] 海の如き音を出しながら、盗賊の隠れ家たるシーハグハーから歩み出て、ラーヤギハに近づくと、ラーヤギハ都城から遠からず近からずの所にある、とある巨大な隠れ場に入り、日中をやりすごした。

その後、かの盗賊の首魁チラーヤは、静寂に包まれた深夜の時間帯に、毛を持つ胸当てや小型の盾などや腿に付ける鈴の音が出ないようにして、ラーヤギハ都城の東門に近づき水袋を掴むと、口を漱いで浄化され完全に清まった者として、鍵[34]を破壊する呪法を導き出した。導き出すと、ラーヤギハ都城の諸々の戸板に水で注ぎかけてから、諸々の戸板を粉砕し、ラーヤギハに侵入した。かくして非常に大きな音で繰り返し音を出しながら、このように言った ―

「さあよいか、神に愛される者どもよ。私はチラーヤという名の盗賊の首魁である。五百人の盗賊と共に隊商長ダナの家を打ち壊すべく、盗賊の隠れ家たるシーハグハーから直ちにここへやって

---

[31] Abhayadeva（p.245）曰く maṅgalyārtham つまり吉祥のために行なう。

[32] samullāliyāhiṃ dāhāhiṃ. dāhā は火器と思われるが、具体的な使用法は不明であり、その形容語 samullāliyā- も dāhā のどのような特性を踏まえたものか定かではない。

[33] chippatūra. サンスクリット形は kṣipratūrya に遡ると考えられ、何らかの楽器を指すと思われるが、具体的にどのような楽器かは不明。

[34] tālu. 諸種のサンスクリット辞典を見る限り、当該語に「鍵」「閂」に類する意味は登録されないが、文脈上この意味を認めざるを得ない。

来た。さあ、新しい母親の乳を飲みたい者[35]がいたら出てくるがよい」

と言って隊商長ダナの家に近づき、ダナの家を打ち壊した。

その時ダナは、盗賊の首魁チラーヤが五百人の盗賊と共に家を打ち壊しているのを目撃すると、恐れ、震え、震撼し[36]、震え上がって、五人の息子たちと共に人気のないところに降りて行った。その後、かの盗賊の首魁チラーヤは、隊商長ダナの家を打ち壊し尽くすと、非常に多くの財産や金などや富、そして娘スンスマーとをぶんどり、ラーヤギハから退出し、シーハグハーに赴くべく出発した。

§139　その後、かの隊商長ダナは自宅に近づいた。かくて、[p.342]非常に多くの財産や黄金と娘スンスマーとが奪われたことがわかると、多大な利と値打ちと価値とがある贈り物を取って、都市警備官たちに近づき、その贈り物を差し出した。その後にこう言った ―

「さて、よろしいか、神に愛される方々よ。盗賊の首魁チラーヤは、盗賊の隠れ家たるシーハグハーから直ちにここへやって来て、五百人の盗賊と共に我が家を打ち壊し、非常に多くの財産や黄金と娘スンスマーとをぶんどるなどして、戻って行きました。ですから神に愛される方々よ、私たちは娘スンスマーの窮地を救いたいのです[37]。神に愛される方々よ、例の、〔チラーヤに奪われた〕

---

[35] ṇaviyāe māuyāe duddhaṃ pāukāme.「殺されたい奴は」の謂い（殺されて新たな母親の母胎に転生し、ということ）。

[36] 「震え、震撼し」と訳した tatthe tasie はどちらも動詞√tras の過去分詞だが、異なる語と理解されていた可能性もある。

[37] icchāmo ... kūvaṃ gamittae. 直訳すれば「私たちは穴に行きたい」だが、スンスマーや財産が穴に秘匿されているわけではないため、「窮地を救う」を意味する慣用表現と見るほうが妥当であろう。Ratnacandra (ed.), *An Illustrated Ardha-Magadhi Dictionary* は kūva の項で ― 但し Ratnacandra は当該の意味を持つ kūva を「穴」の意味を持つ kūva と別の語とし、語源不明とする ― “Act of helping a man in rescuing his stolen property”という訳語を挙げる。

財産・黄金・宝・宝珠・真珠・巻貝・水晶・珊瑚・紅玉・素晴らしい価値のあるもの・富はあなた方のものですが、娘スンスマーは私のものです」

そこで、彼ら都市警護官たちはダナの言うこの件に同意し、武装して兵器と武器とを持ち、非常に大きな勝鬨などや海の如き音を出しながら、ラーヤギハから出て行き、盗賊チラーヤに近づいて、盗賊の首魁チラーヤと対峙した。その後、彼ら都市警護官たちは盗賊の首魁チラーヤを打ち倒し、かき乱して、撃退した。その後、彼ら五百人の盗賊たちは、都市警護官たちによって打ち倒され、かき乱されて、撃退されたまま、例の豊富な財産・黄金・宝・宝珠・真珠・巻貝・水晶・珊瑚・紅玉・素晴らしい価値のあるもの・富を吐き出し、撒き散らしながら、四散した。そこで彼ら都市警護官たちは、その豊富な財産や黄金を入手し、ラーヤギハ都城に近づいた。

かくて、当のチラーヤは盗賊の兵たちが彼ら都市警護官たちによって打ち倒され、かき乱され、優れた勇者によって打ちのめされ〔たのを見て、〕[p.343] 恐れ、震えて、娘スンスマーを掴み、村外れにあり長い道を有する巨大な或る深い森に入って行った。その後、かの隊商長ダナは、チラーヤによって娘スンスマーが深い森に面し連れ去られようとしているを見ると、五人の息子たちと共に自らを六番目の者となして武装し、〔鎧を纏って〕締め上げ、〔弓のための布を腕に絞り巻き、兵器と武器とを持って〕チラーヤの足跡を辿って進みつつ、喚いたり、「ハッ」「プッ」と言ってみたり、脅し怖がらせながら、後を追った。

その後、かのチラーヤは、例の隊商長ダナが自らを六番目の者となして五人の息子たちと共に武装し、〔鎧を纏って〕締め上げ、〔弓のための布を腕に絞り巻き、兵器と武器とを持って〕一緒に後を追って来るのを見ると、踏ん張る力がなく、無力で、勇気がなく、男としての勇猛さを失って、娘スンスマーに対して思いを遂げることができなくなった時、その時に彼は疲れ、喘ぎ、息も絶え絶えとなってしまい、暗色の蓮〔やスイギュウの角のこぶや亜麻の花の色をした、剃刀のように鋭利な〕剣を掴むと、娘スン

スマーの頭部を切断し、それを掴んで、村外れにあるその深い森に入って行った。その後、かのチラーヤは村外れにあるその深い森の中で、渇きに制圧されたまま、方角がわからなくなってしまい、盗賊の隠れ家たるシーハグハーにたどり着くことなく、中途で死んだ。

— まさしくこのように、沙門たる友よ、出家した状態でありながら、嘔吐物を漏らすなどする、粉々に破壊される法則を持つこの粗大な身体の容色のためなどに食事を摂取するなら、その者は [p.344] 他ならぬこの世で多くの男性修行者たち・女性修行者たち・男性在家信者たち・女性在家信者たちにとって非難に値する者として〔輪廻を〕さまようことになる。それはあたかも、例の盗人チラーヤのようなものである [38] —

その後、かの隊商長ダナは、自らを第六の者となして五人の息子たちと共にチラーヤを追い立てつつも、疲れ、喘ぎ、息も絶え絶えとなって、盗賊の首魁チラーヤを自らの手で捕まえることができなかった。彼はそこから引き返し、チラーヤによって殺害された娘スンスマーに近づくと、斧で切り倒された金厚朴のように〔大地に四肢もろともバタリと崩れ落ちた〕。その後、自らを第六の者となした隊商長ダナは息を吹き返すと、声をあげ、大声をあげ、呻きながら、非常に大きな声で「くっ、くっ」と声を出し [39]、慟哭し、非常に長い間、涙を流した。

その後、かの隊商長ダナは、自らを第六の者となして五人の息子たちと共に、村外れにあるその深い森の中でチラーヤをあらゆ

---

[38] 修行者は修行に耐えるためだけに食事をとるべきで、美容などのために食事をとるべきではない、という戒めである。修行者の対極として引き合いにだされるのがチラーヤだが、彼は確かに盗賊として己の欲望のままに生きてきた描写はなされているものの、美容のためなどに食事をとるという描写が強調されているわけではない。

[39] kuhakuhassa. オノマトペ由来の動詞√kuhakuh の Gerund か。類例として、R.N.Shriyan は *A Critical Study of Mahāpurāṇa of Puṣpadanta* (Ahmedabad, 1962), p.161 で√kahakah の現在分詞 kahakahaṃta-が Puṣpadanta の同作品に存在することを指摘している。但し、Shriyan によると同語の意味は「けたたましく笑う」である。

るところで完全に追い立てつつありながら、渇きと飢えとによってすっかり打ちのめされてしまい、村外れにあるその深い森の中で、あらゆる方面で水を探し回った。そうした末に、疲れ、喘ぎ、息も絶え絶えとなって、意気消沈して、村外れにあるその〔深い森の〕中で水を味わうこともなく、命を奪われたスンスマーに近づいて、ダナは長男に声をかけ、このように言った ―

「息子よ、このように [p.345] 私たちは、娘スンスマーのためにチラーヤをあらゆるところで完全に追い立てつつありながら、渇きと飢えとですっかり打ちのめされてしまった。村外れにあるこの深い森の中で、あらゆるところで水を探し回っているけれども、全くその水を味わっていない。かくして私たちは、水を味わうことなく、ラーヤギハに着くことも叶わないのだ。そうであるから、神に愛される者よ、お前たちは私の命を奪いなさい。私の肉と血とを摂りなさい。その食事でしっかりとなったならば、その後に村外れにあるこの深い森をお前たちは脱出することになるだろう。そしてラーヤギハにお前たちは到達することになるだろう。盟友や〔父方の血縁や〕親族や〔自分の血縁や母方の血縁や使用人〕とお前たちは出会うことになるだろう。そしてお前たちは、実利と人倫と福徳とを分かち合う者たちとなるだろう」

その後、その長男は隊商長ダナによってこのように言われると、隊商長ダナにこのように言った ―

「お父様、貴方は私たちにとって父であり[40]、長上たる方であり、神のような方であり、固定する方であり、確立する方であり、完全に護って下さる方であり、保護して下さる方です。ですから、お父様、どうして私たちが貴方の命を奪うというのでしょうか。貴方の肉と血とを摂るというのでしょうか。ですから、お父様、貴方が私の命を奪って下さい。肉と血とを摂ってください。村外れにある深い森を脱出してください…[41]実利と人倫と福徳とを分

[40] piyā.「愛しい方」あるいは「身内の方」、つまり priya の可能性もあるが、Abhayadeva が pitā つまり父とするのに従った。
[41] 点線で記した省略部分は、原文では taṃ ceva savvaṃ bhaṇati「そして他ならぬその全てを彼は語る」とある。

かち合う方となりましょう」

その後、かの隊商長ダナに次男が言った ―

「お父様、[p.346] 長上であり神である長男の命を奪うことを私たちは止めましょう。お父様、貴方は私の命を奪って下さい…分かち合う方となりましょう」

― このようにして五男までが〔同じことを言った〕。そしてその後、かの隊商長ダナは、五人の息子たちが心中で望んでいることがわかると、彼ら五人の息子たちにこのように言った ―

「息子たちよ、私たちは、一人たりとも命を奪うことはやめよう。娘スンスマーのこの小さな体は息が離れ、命を棄て去っている[42]。ゆえに息子たちよ、私たちにとってよりよいことといえば、スンスマーの肉と血とを摂ることである。そこで、私たちがその食事でしっかりとなったならば、ラーヤギハに到達することになるだろう」

その後、彼ら五人の息子たちは、隊商長ダナによってこのように言われると、この件に同意した。

その後、かの隊商長ダナは五人の息子たちと共に着火用の木片を作った。作った後、小さな棒を作った。作った後、小さな棒で着火用の木片を擦った。擦った後、火を熾した（√pat）。熾した後、火を煽った（sam-√dhukṣ）。煽った後、複数の木片を投げ込んだ。投げ込んだ後、火を燃えたたせた（pra-√jval）。燃えたたせた後、娘スンスマーの肉を焼いて、肉と血とを摂った。その食事でしっかりとなって、ラーヤギハに到達し、盟友や父方の血縁〔や親族や自分の血縁や母方の血縁や使用人〕と出会った。そして、かの豊富な財産や黄金や宝などを分かち合った。その後、かの隊商長ダナは娘スンスマーの、多くの世俗的な〔葬礼を行なっ

[42] jīvavippajaḍha.「霊魂によって棄て去られた」の可能性もあるが、同様の言い回しが見られる NDhK I 2 §38 (p.85) では jīviyavippajaḍhaṃ とあるのを踏まえて訳した。

て〕悲しみから逃れた。

§140　その時、その機会に、沙門マハーヴィーラ尊師はラーヤギハ都城にある [p.347] グナシラア（Guṇasilaa）霊域で説法の機会を持った。そこで、隊商長ダナは息子と一緒に教えを聞いた後、出家した[43]。十一のアンガ（Aṅga）聖典[44]を知り、一ケ月の断食行を経てソーハンマ（Sohamma）[45]に再生して、マハーヴィデーハ（Mahāvideha）地方[46]で彼らは成就（＝解脱）するであろう[47]。

ジャンブーよ、隊商長ダナは容貌のため、あるいは美容のため、あるいは力のため、あるいは〔味覚〕対象のために娘スンスマーの肉と血とを摂ったのではない。ただラーヤギハに到達するためであった。まさに同じように、我々は男性のジャイナ教出家者であろうと女性のジャイナ教出家者であろうと、嘔吐物を漏らし、

---

[43] pavvaiyā（複数形）とあるので、ダナだけが出家したとは考えられない。但し底本が用いた諸写本のうち、he1 と je1 という写本では pavvaie（単数形）とあり、また Anga Suttāṇi 版でも pavvaie と校訂されている（同版で pavvaie 以外の異読は指摘されていない）。

[44] 白衣派ジャイナ教徒の伝承によると、アンガと呼ばれる範疇には、マハーヴィーラ在世時には十二番目として『ディッティヴァーヤ（*Diṭṭhivāya*）』という経典が存在したが、それは現在では散逸してしまった。つまり「十一のアンガ」という時代考証を無視した表現は、既に『ディッティヴァーヤ』が現存しない時代に本章が編集されたことを示す痕跡である。

[45] ジャイナ教宇宙論では、宇宙は高層建築物の如く看做され、神々の世界は四層構造である。その最上層にヴァイマーニカ（Vaimānika）と呼ばれる神々が存在し、彼らの世界は十段に細分される。その最下段の南部にサウダルマ（Saudharma）、アルダマーガディーではソーハンマと呼ばれる領域がある。この領域を含め、詳しくは W.Kirfel, *Die Kosmographie der Inder* (Bonn & Leipzig, 1920), pp.291-315 を参照されたい。

[46] 地上世界の中心に聳えるメール（Meru）山の麓にある領域。現実のインド亜大陸はバラタ（Bharata）と呼ばれ、地上世界の最南部に存在する。なぜマハーヴィデーハでの解脱を予言されるかというと、バラタでは聖典の一部が失われたためにジャンブー以降解脱者が存在せず、完全なジャイナ教の教義を学び解脱することが今のバラタでは不可能だという教義 ― 本章の時代設定は、聖典が完備しているマハーヴィーラ生存時だが ― が関係しよう。私見では、このようなジャイナ教の解脱観と、阿弥陀浄土をはじめとする仏国土観との比較研究が今後は必要かと思われる。

[47] sijjhihiṃti と複数形が使用されているが、lā1 写本では sijjhihiti と単数形が使用され、Anga Suttāṇi 版でも同様に sijjhihii と単数形を採用する（同版で複数形を示す写本の存在は示されていない）。

胆汁を漏らし、精液を漏らし、血を漏らすなどする、必ずや棄て去られるべきこの粗大な身体の容貌のため、あるいは美容のため、あるいは力のため、あるいは〔味覚〕対象のために食事を摂るのではない。ただ成就へと向かい、到達するためであれば、その者はこの生存において多くの男性修行者たち女性修行者たち・男性在家信者たち・女性在家信者たちにとって尊敬に値する者として〔輪廻を〕超えて行くであろう。

ジャンブーよ、このようにして、沙門マハーヴィーラ尊師によって、『ナーヤ』第 18 章のこの意味が説明された。

— と、このように私は語る。

『ナーヤ』第 18 章が終了した。